

アドルフ・ロースの労働者住宅

-戦間期ウィーンの労働者住宅を通して-

アドルフ・ロース　労働者住宅　赤いウィーン
自給自足生活　ジードルング　ゲマインドバウテン

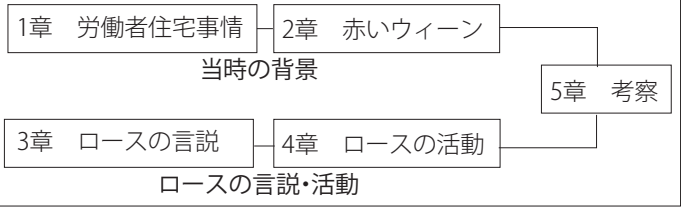
序論

本研究は、ウィーンの建築家アドルフ・ロース(Adolf Loos, 1870-1933)の労働者住宅関する活動に焦点をあてる。ロースは1920年4月から1年以上、労働者住宅建設のために無報酬で働いた。さらにその後、1921年4月1日から1924年6月30日まで、集合住宅建築局のチーフアーキテクトとして働いている。¹また、職人をはじめとした労働者²に関する言説を数多く残している。こういった労働者への眼差しはロースが「装飾と犯罪」における装飾忌避の思想の根拠の一つにも挙げる重要なものである。しかし、これまでなされたロースに関する研究は、上層階級向けの建築作品が中心で、労働者住宅に関する研究は部分的にしか行われていない。また、ロースの労働者住宅に関する活動は、当時のウィーンの特異な住宅事情や、赤いウィーン³市による政治的な政策との関連の理解なくしては意図を理解できない。そこで、本研究はまずロースが労働者住宅を設計した歴史的な背景をおさえた上で、ロースの労働者住宅に関する活動を理解することを目的とする。

図1　ウィーンの労働者住宅関連年表及び各章で扱う範囲

年	1919	1921	1923	1934	＼
市民	自給自足運動				
赤いウィーン 市行政	自給自足支援政策 ジードルング／／ゲマインドバウテン				
ロース	ウィーン市住宅建設局 一枚の壁からなる家 ・ジードルングの ・ライツの ・テラスハウス				
1章	2章				
3章	4章				

図2 本論構成



第1章　ウィーンの労働者住宅事情

本章は、アドルフ・ロースが労働者に関心を持ち、労働者住宅を設計するに至る背景を既往研究を用いて整理した。

◇劣悪な住環境

ウィーンの労働者住宅の劣悪さは、次のように分けられる。住居の狭さ、近代的な衛生設備の欠如、高額な家賃、部屋の又賃しやベッドゲアーによるさらなる環境悪化と風紀の乱れである。

◇劣悪な住環境の背景

住宅が不足した背景には急激な労働者人口の流入がある。さらに、ウィーンでは政治と労働者住宅を投機目的で建設していた資本家が癒着していた。そのために一方的に家主の権利を拡大する法制度が整備され、借家人の保護する政策は第一次大戦まで一切行われなかった。

◇対抗運動としての自給自足生活

労働者は家主のつるし上げやシャリバリ⁴などの抗議運動を行った。しかし労働者住宅の劣悪な環境は依然として改善しないまま、第一次大戦が勃発、オーストリアは敗戦する。敗戦はさらなる住宅不足と危機的食糧不足を引き起こすこととなった。このような状況に対して、一部の労働者がウィーン市郊外で自給自足の生活をはじめる。自給自足運動は数千世帯の家族が掘り立て小屋に住み、ウィーン市の食料供給を助けるほどの規模であった。



左: 図3　住居の狭さから立って食事をとるウィーンの労働者



右: 図4　自分たちで家进行るウィーン市民

第2章　赤いウィーンの労働者住宅

戦後はハイパーインフレにもかかわらず、第一次大戦中に定められた借家人保護法によって家賃が据え置かれており、私設の賃貸住宅の新設が実質的に不可能なものとなっていた。その中で、オーストリア社会民主党がウィーン市の政権を握った1919年から1934年の間、労働者住宅事情を改善するべく様々な政策を行った。

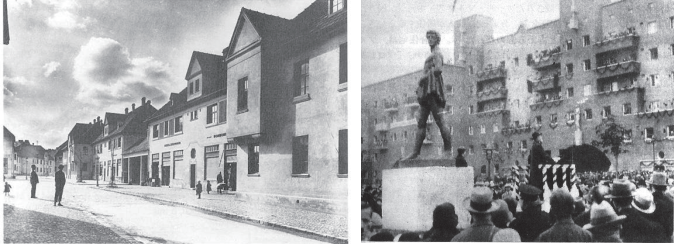
◇自給自足生活支援と郊外の戸建てジードルング(1919～1923)

赤いウィーンの市行政は、ウィーン郊外で違法に行われていた自給自足生活を支援するための団体を立ち上げ、安価で住宅建材を提供するなどした。さらに、郊外に菜園を持つ戸建てのジードルングを建設し、労働者に提供することで、元来違法行為であった自給自足生活を行政主導で推進した。しかし1923年、ウィーンが経済危機を脱したことで自給自足の必要性が薄れたため、赤いウィーンの労働者住宅建設計画においてジードルングの形式をとる必然性は失われていった。

◇都市の大規模集合住宅ゲマインドバウテン(1923～1934)

1923年以降の労働者住宅は、都市部に共用の中庭を特徴とする巨大な「ゲマインドバウテン」と呼ばれる形式の集合住宅が主流となった。1934年までに建設された集合住宅は戸数にして

64,000戸にのぼる。ゲマインドバウテンは社会民主党の政治的思想を強く反映したものであった。この大規模に展開された集合住宅建設計画は1930年頃から世界経済危機のために衰退し、1934年2月、ナチスの内乱によって完全な終焉を迎えた。



左: 図5　シュメルツのジードルング外観(1925)



右: 図6　カールマルクスホフ　落成式の様子(1931)

第3章　1921年以前のロースの労働者に関する言説

ロースは執筆活動をはじめた19世紀末から労働者や田舎に関する言説を繰り返し述べている。ここではその一部を紹介する。

◇労働者層に関するもの

伝統的な職人の仕事が時間単位ではかられる労働にとってかわられた結果、長時間労働を強いられ、「犯罪的なまでに安い賃金」しか支払われていないことを指摘している。

◇労働者の出身である田舎に関するもの

時代の変化によって田舎の人々が都会に進出しているが、彼らが資格好から差別されている現状を指摘している。また、都会から郊外の集合住宅に移り住もうとする者は、「農民に教えを乞ねばならない」と述べている。

第4章　1921年以降のロースの労働者に関する活動

本章ではロースが労働者住宅に関して行った具体的な提案や計画をみてきた。ロースは1920年4月、ウィーン郊外で自給自足生活を送る人々のために、住宅建設を指導する部局を設置し、1年以上無報酬で働いた。その後、1921年4月1日から1924年6月30日まで、集合住宅建築局のチーフアーキテクトとして働いた。1920年以降、5つのジードルングの住宅が実際に建設され、労働者住宅を主題とした言説は少なくとも6つ残されている。

◇自給自足生活の支援

市民の自給自足生活を支援するために、菜園での野菜栽培に意欲的な労働者に土地を貸し、住宅資材を安価で提供するべきだとする提案がある。また、経済危機の点からも自給自足の重要性を説いており、自給自足生活者のデモを宣伝する一文もある。

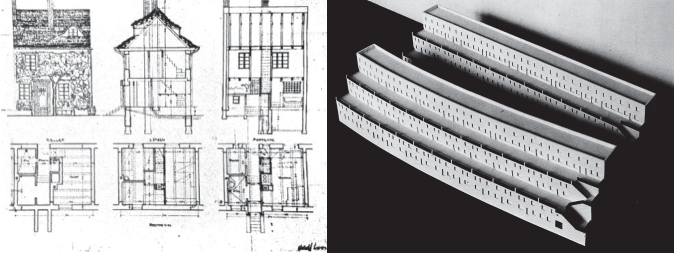
◇内部計画

ロースはまず、住居は1階を日中の生活空間、2階を夜寝るためだけの空間と位置づけている。その上で、2階に家族個々人の寝室を別個につくこと、1階と2階を近づけるために階段は急勾配にし、1階の天井を低くするなどの計画を残している。また、1階は特に食事空間としてのリビングの重要性に着目している。これらは、実作ではラインツのジードルングに反映されている。

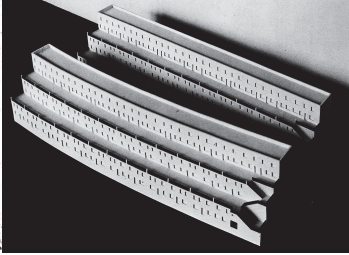
◇外部計画

労働者住宅においてロースは庭を重要視している。ジードルングでは野菜栽培の観点だけではなく生活の質を上げるものとして、

庭を住宅以上に重視する。都市型の高層集合住宅であるテラス・ハウスでは、子供の遊び場を確保するために、段状の形態とメゾネット形式をとり、各階に広いテラスを設ける計画を残している。



左: 図7　ラインツのジードルング計画案、図面(アドルフ・ロース、1921)



右: 図8　テラス・ハウス計画案、模型(アドルフ・ロース、1923)

第5章　考察 - ロースの労働者住宅の意義

◇ロースの思想が彼の労働者住宅設計に与えた影響

ロースは労働者住宅を建設する以前から、労働者の生活や仕事環境の劣悪さに強い関心を抱いていた。また、田舎の人々が都会に進出していることや、田舎と郊外と都会にふさわしい建築はそれぞれ異なることを意識していた。労働者住宅の設計はロースの掲げる新しい労働者の生活像に基づいて行われ、予算の限られる中で、内部/外部空間が熟慮されている。

◇ロースと赤いウィーンの比較

1921年ロースの設計したラインツのジードルングは、赤いウィーンの政策に則り菜園を併設した郊外の戸建て住宅となっている。1923年設計のテラスハウスも、都市型の大規模集合住宅である点は赤いウィーンの政策と一致する。しかし、共用の中庭を設けず、段上の形態によってテラスを広くとり、メゾネット形式の上階に家族一人一人に個別の寝室を設ける案はロース独自のものである。ロースは社会主義者であることを表明しているが、赤いウィーンの社会民主党とは異なり、個々人の独立を重要視していたことが考察できた。

◇ロースの労働者住宅と他の作品にみられる一貫性

労働者住宅と、同時期に設計された上層階級向けの住宅との共通点の一つに、寝室の配置が挙げられる。上層階級向けの住宅においても、寝室を居間の上階にまとめて配置している。このことから、労働者住宅はロースの設計思想において例外的なものではなく、一貫した思想に基づくものであることが確認できた。

結論

以上より、アドルフ・ロースが労働者住宅を設計した歴史的な背景を把握した。また、ロースの労働者に関する言説と活動を整理した。それらを照らし合わせることで、戦間期ウィーンの労働者住宅におけるロースの労働者住宅の持つ意義と特色を明らかにした。

また、ロース史における労働者住宅の位置づけを明らかにした。
【図版出典】 図1,2:筆者作成　図3:小沢 弘明『労働者文化と労働運動：ヨーロッパの歴史的経験』木鐸社、1995、p155　図4:『THE NATIONAL GEOGRAPHIC MAGAZINE JANUARY, 1923』p84　図5:Eva Blau『The Architecture of Red Vienna』The MIT PRESS p110　図6:小沢 弘明『労働者文化と労働運動：ヨーロッパの歴史的経験』木鐸社、1995、p169。　図7:Burkhardt Rukschciol『Adolf Loos』p542　図8:Burkhardt Rukschciol『Adolf Loos』p285
【注釈】 注1: 川向 正人『アドルフ・ロース：世紀末の建築言語ゲーム』住まいの図書館出版局; 星雲社 (発売)、1987、p203　注2:1900年前後のウィーンでは職人の仕事が工業化による分業によって時間単位ではかられる労働に変わりつつあった　注3:1919年社会主義思想を持つウィーン社会民主党がウィーン市議会第一党となったウィーン市を指す 注4:ここでは夜中に抗議相手の家の前で大音量で騒ぐ抗議活動を指す

Workers' House of Adolf Loos

ISHII Hiroki

- Through the Worker's Housing of Interwar Vienna -

*早稲田大学創造理工学部　学部4年

*Under graduate student, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

序章

- 第1節 はじめに
- 第2節 研究目的
- 第3節 研究方法
- 第4節 既往研究

第1章 ウィーンの労働者住宅事情

- 第1節 はじめに
- 第2節 労働者住宅の実情
- 第3節 住環境の悪化した背景
- 第4節 借家人の抗議運動
- 第5節 労働者の自給自足運動
- 第6節 小結

第2章 赤いウィーンの労働者住宅

- 第1節 はじめに
- 第2節 借家人保護政策の成立
- 第3節 自給自足生活を支援する政策(1921-1923)
- 第4節 ジードルンク(1919-1924)
- 第5節 ゲマインドバウテン(1923-1927)
- 第6節 終焉期(1928-1934)
- 第7節 小結

第3章 1921年以前のロースの労働者に関する言説

- 第1節 はじめに
- 第2節 職人と建築家を対比させる言説
- 第3節 労働者の仕事環境や生活に対する言説
- 第4節 田舎に関する言説
- 第5節 小結

第4章 ロースの労働者住宅

- 第1節 はじめに
- 第2節 自給自足生活を支援する活動
- 第3節 内部計画
- 第4節 外部計画
- 第5節 都市計画
- 第6節 ウィーン市営集合住宅への批判
- 第7節 小結

第5章 考察

- 第1節 はじめに
- 第2節 ロースが労働者住宅を設計した背景
- 第3節 赤いウィーンとロースとの関係
- 第4節 労働者住宅と他のロース作品との関連
- 第5節 テラスに関する考察
- 第6節 小結

結論

謝辞

巻末資料

参考文献